

こんな時代こそ、多文化研

～「アンチ共生」の潮流から目を背けない勇気～

下川進
(日本放送協会 国際放送局英語センター長)

35年の重み。川村千鶴子先生のメッセージに共感する各界の仲間たちが、多文化社会について話し合い、それぞれの分野での研究と実践を積み重ねて来た35年に、心より敬意と祝意を表したいと思います。

しかし今、お祝いムードでいられない事が、次から次へと世界中で起き続けていて不安でなりません。ここではあえて「そこにある危機」に向かってみます。

今、多文化共「創」どころか共「生」にすら、アレルギーや恐怖感を抱いて否定する人が増えているのを感じます。SNSがそれを後押しし、既存の大手メディアを敵視し、様々な選挙結果に影響を及ぼし、社会の分断を生んでいます。

括弧付きとはいえた民主主義のリーダーとされてきたアメリカで今起きていることが世界に影響を及ぼし、戦後世界が模索してきた、共生への知恵と努力が全否定されたように感じることも起きています。

先ほど、耳を疑うニュースが入ってきました。ワシントン近郊での飛行機事故。救出も始まらぬうちにトランプ大統領は、航空当局が、DEI (Diversity, Equity, Inclusion = 多様性、公平性、包摂性) の方針もと、知的障害や精神疾患の人たちを積極的に雇っていることが事故の背景にあるという考え方を示したのです。原語では、ここでは書けないひどい言葉も使われていました。

「そんな、めちゃくちゃな」 — ネット上の悪質な根拠なき挑発レベルにしか思えないこの言葉も、全世界で「まじめ」に国際ニュースとして伝えられました。発言は政治的に計算されたもので、狙い通り支持者には響きそうですが、ひとりの政治家の発言にとどまらず、世界に様々な形で影響を及ぼし、本来なら強く怒るべき事も毎日起きれば、我々の感覚も麻痺していきそうです。

こうした考え方を支持する人が増える背景には何があるのか。様々な要因があると思いますが、いわゆるリベラル的な価値観を大切にする人たちの中に、これに反対する人を「学びが足りない人」と捉える人が少なくなかったことも、その一つかもしれません。「上から目線」の説教と感じての反発です。「トランプ的」な価値観を支持する一般の人たちは、なぜそうなのか。想像してみる意義はあるはずです。

たとえそれが無知や誤情報に起因していたとしても、自らの境遇への不満や不安を「トランプ的」なものを通して心の安寧に変えているのかもしれません。また、人が「満たされた」と感じる状態、well-being は人によって違うようです。民族や立場に関係なく個人の自由と尊厳が守られる状態が私には well-being ですが、自国第一で自分たちが上に立ち、自らの規範の中

で、自らが考える「男らしさ・女らしさ」で生きることを well-being と考える人もいるのが、現実の世界です。

このような価値観の人と共通言語を見つけるのは難しいですが、価値観の違いこそ、「多様性」を大事にする人々は、目を背けずに向き合うことが大切なのではないでしょうか。同じ価値観の人たちだけで交流するのは心地よいですが、違う価値観の人たちとの接点が持てません。

私の危機感について書きましたが、アメリカも「国民の半分程度が全くそうではないので心配しすぎだ」と言われるかもしれません。しかし、今自分の周りも含めて何か地殻変動が起きている気がしてなりません。この空気感を生み出す人たちから目を背けると、現状の正確な分析ができず、「致命的な分断」を回避するためのヒントを見つけるチャンスを逃してしまう気がするのです。

各分野で実践を積み重ね、共創の現場を体現してきた多文化研。この厳しい時代に、違う価値観を持つ人たちへのアプローチと分析も模索することで、状況を開拓する新たな知恵が生まれるものと信じています。こんな時代だからこそ、多文化研の出番です。

著者プロフィール：

下川 進

神戸市出身 早稲田大学政治経済学部卒

NHK国際放送局英語センター長

中国や台湾などアジア各地で取材し、アフガニスタンやサハリンにも滞在。

英語ニュースのキャスターも務めた。主な関心分野は中国社会と日中関係。